

「幼児教育の源流」(VI)

フレーベル

(一) その生涯

フレーベル (Friedrich Wilhelm August Froebel) は一七八二年ドイツのチューリンゲンの森の田舎村オーベルワイスバハに生まれた。

父は厳格な牧師であった。多くの教区に区分された約五千人の魂の救済を一手に引き受けていたことから、その活躍ぶりが想像される。彼には牧師の義務を決して忘れない厳しさがあった。また彼は田舎の牧師には珍しいほど教育のある人であり、また学者でもあれば経験家でもあった。このような父の態度は家庭においても同様であった。朝夕家族全員が集まっの礼拝が行なわれ、それによって家族は精神世界へと導かれ、

猪岡猛



心情生活は豊かになっていった。フレーベルが父から受けた宗教的感化は非常に大きなものであった。

母はフレーベルが生後わずか九カ月のときに病死した。いうまでもなく、この母の死は彼に大きな影響を与えた。

父はフレーベルが四歳のときに再婚した。当時のフレーベルは母の愛と両親の愛との欠除を身にしみ感じていたので、新しい母に対しては当然それを求めたのである。はじめのうちは彼の感情がこの新しい母に素直に受け入れられた。彼はすっかり幸福になり、のびのびと成長するかにみえた。しかし、この喜びと幸福も長くは続かなかつたのである。というのは、間もなく新しい母は男児をもうけたからである。このころからフレーベルに対しての態度が変わってきた。母の愛はフレーベルか

らしだいにその男児に移っていった。そして、フレীবベルに對してはことごとく叱責や非難が加えられ、やがて母との間には感情的に大きな亀裂ができてきたのである。

そのころからフレীবベルはほんやりとひとり室内から青空を眺めたり、教会の塔を見あげたりして、さびしく過すことが多くなつた。また彼の家は、他の建物や壁や生がきや、木のさくできちんと囲まれ、それから先は中庭や芝生や菜園で囲まれ、これを越えて出ていくことは固く禁じられていた。さらにこの屋敷は左右には建物、前方には大きな教会、後方には高い山の側面をのぞむ以外には何の見晴らしもなかった。したがって遠くの方を見渡すことはできなかった。彼はただ頭の上に、山地によくあり勝ちな晴朗な空を仰ぎ、周囲に清き新鮮な空気を感ずるのみであつたのである。そこでは、厳格と不自由と束縛のみが強く印象に残り、彼にとつては、愛に満ちた暖かい家庭の空気を味わうことはできなかったのである。

学齡期になつたフレীবベルは、父の希望によつて女子小学校に入学した。その小学校はきわ立って清楚であり、また安静と優雅と秩序とが支配しており、これらのことがフレীবベルの内面性の発達に大きな影響をおよぼしたのである。それは

彼にとつて一層高い精神生活への出発点ともいえるものであつた。しかし、家庭での生活は依然として孤独であつた。家庭にいながら家庭の味を味わい得ない状態であつた。

彼が十歳のとき、なき母の兄ホフマンが彼の家にきてしばらくの間滞在したことがあつた。このとき、ホフマンはフレীবベルが逆境の中にいることを知り、父にフレীবベルをひき取ることを申し出た。父は喜んでこの申し出を受け入れた。このようにして彼は伯父ホフマンの家へ引き取られたのである。

ホフマンの家は、フレীবベルの家とは異なつて、落着きと平和があつた。「私の父の家には厳格が、そしてここには温和と親切とが支配していた。あそこでは私は私に關して不信用をみたが、ここでは信用をみた。あそこでは私は束縛を感じ、ここでは私は自由を感じた。今までは自分と同じ年輩の少年の仲間に入ることはほとんどなかったが、ここでは実に四十人の学校友だちをみつけた。伯父は家続きの庭園をもつていて、そこにいくことを私は許されていた。のみならず、欠くことのできるい規則であつた時間を堅く守つて帰宅さえすれば、その近くはどこに行くのも自由であつた」^①のである。小学校も男子校にかわり快活な学校生活を送ることができた。特にそこで行なわれた伯父の説教を中心とする宗教教授の時間に彼の心はひきつ

けられた。彼はそこで精神生活を豊かにするための糧^{かて}をじゅうぶんに取り入れたのである。

このようにしてフレールベルはホフマンのもとに四年間滞在したのであるが、この期間中に彼の生活は三つの方向をもっていたといわれている。すなわち、宗教的な啓発発展、子どもの遊戯に関すること、伯父の平和な家庭生活である。

さて、伯父の家における幸福な生活も、堅信礼で終止符をうった。十四歳の少年フレールベルは市民のひとりとして職業を決める必要に迫られた。本人の希望、父の忠告、母の提案などによって、一七九七年にウィックという林務官のもとに弟子入りした。ところがウィックは自分のもっている有能な知識を他人に教える術を知らず、また多忙のためにフレールベルを指導することができず、結局は彼自身の独学によって植物学、数学、語学などを学んだのである。二カ年の見習期間を終えて、彼はイエナ大学に入学した。ここでは応用数学、算術、代数幾何、鉱物学、博物学、物理、化学、財政学、林樹栽培、林業、建築学、測量術などの講義をきいた。当時のイエナ大学にはシラー、シエリング、ノヴァーリスなどがいて、ドイツ・ロマン派の中心地であった。ここで彼は内的な眼を開かれたのである。

在学二年目のときに彼は経済的理由によって大学をやめて父

のもとに帰った。しかし、一八〇二年に父が死亡し、その後は父の家を出て山林書記になったり、農業書記になったりする。その間に彼は将来の職業について考え、結局建築家になることにした。ところがたまたま友人の紹介で小学校長のグルーナに会い、すすめられて同校の教師となった。彼はここで教師の使命の高さにうたれ、新しい世界を発見するにいたった。

一八〇五年、二十三歳のときに彼はイヴェルドンにペスタロッチャーを訪ねた。当時のペスタロッチャーはその教育法によって名声がとどろいていたが、フレールベルが教育事業に携わる初期において、ペスタロッチャーに出会ったことは、彼の将来を決定づけるのに大きな影響を与えたと考えられる。翌一八〇六年にフレールベルは、家庭教師をしていたホルツハウゼン家の三人の教え子とともに再びペスタロッチャーを訪ねている。そこでの彼の生活は内的にも外的にも喜びに満ちたものであり、多くの刺激を受けて感激的なものであった。

一八一一年、フレールベルは自らの学問研究への意欲を満たすためにゲッティンゲン大学に入学し、再び学生生活に入った。その後、鉱物学のワイス教授を慕って、一八一二年にベルリン大学に移った。同教授のもとに鉱物学、結晶学、物理学などを研究したほか、同大学の教授であったシュライエルマッヘルの

宗教哲学の講義にも耳を傾けた。ところが時あたかもナポレオンの侵入によってヨーロッパ全体が騒然となってきた。フレールの祖国ドイツも戦乱の中におかれた。彼は大学生活に別れを告げ、ドイツの自由のために義勇軍に参加するのである。

一八一四年、ナポレオンの失脚によってヨーロッパに平和が訪れると、義勇軍は解散された。フレールは同年八月、ウィス教授にのぞまれてベルリン大学の鉱物理学の助手となった。このころからフレールの興味と関心はしだいに人間の教育へと移っていった。人類発展の法則にしたがって人を教育することこそが、自分に課せられた使命であると考えるようになった。

ちょうどそのころ、兄のクリストフが病兵の看護に当たっていて伝染病にかかり病死したが、そのあとに残った三人の子どもに關しての相談の手紙を受け取った。この時に彼の心は決まった。ウィス教授の引き止めにも応ぜず、兄の残した子どもたちの教育にうち込もうと決心したのである。その時のフレールはすべてを捨て、すべてを犠牲にして、人間教育へ帰って行きたくてたまらず、発展の法則にしたがって人間の本質に迫り、人間教育への仕事にすべてをうち込もうとしていた。そこで彼はベルリンでの地位を捨て、新しく教育事業を起こしたのである。

一八一六年十月、グリースハイムに「アルゲマイネン・ドイ

ツェン・エアーツィーウンクアンシュタルト（一般ドイツ教育所）」を開き、待望の教育活動の第一歩を踏み出したのである。

生徒は兄クリストフの子三名、兄クリスチャンの子二名計五名、時にフレールは三十四歳であった。この教育所は翌年カイルハウに移され、いわゆるカイルハウ学園として発展していくのである。この年には、かつての義勇軍の時に友人となったミッテンドルフとランゲタールも参加し、着々と学園の基礎がつくられていった。校舎もできあがり、生徒たちもしだいにその数を増していった。一八一八年、三十六歳の時フレールはウイヘルミネを夫人に迎えた。「一八一八年の九月、今やすでに大きくなって子どもや兄弟のふえた家庭のために、わたくしは主婦を迎えた。自然と児童と対するわたくしと同じ愛と、教育と人間らしい生活の実現とに対するわたくしと同じ高い努力的な心とが、彼女をわたくしに結合させた。彼女はしばらく前から彼女の家に養女にしていた娘を助手として自分の考えでいっしょにつれてきた」^②のである。ウイヘルミネ夫人は、フレールの教育思想の発展の上に忘れることのできない功績を残したといわれている。カイルハウ学園は一時六十人を越す生徒でにぎわったが、学園に内紛が起こったり、周囲の誤解や政府の不当な干渉などのために、しだいに衰退の道をたどってい

た。

この間にフレibelは一八二六年、四十五歳の時に不滅の書「メンシェンエアーツィーウンク」を刊行した。この「人間教育」こそは、カイルハウ学園で得た教育の真髄を示したものであり、フレibelの教育思想全体を明らかにしたものである。

その後、マイニンゲン公の助手と援助とによって、領地ヘルバに国民教育所を建設しようとしたが、それも公の近臣たちの反対によって不成功に終わった。しかし、フレibelは自らの教育目的達成への使命感に徹していた。したがって、その教育的使命を果たすための彼の種々の教育的努力は、たとえいかなるものに妨害されても、少しも動ずるところがなかった。

その後、スイスのワルテンゼーやウイルソーにおいても、フレibelの進歩的な考え方が、保守的な旧教の僧侶や信者から迫害を受けたが、それらがかえってフレibelを奮起せしめた。

一八三四年彼はブルクドルフにおいて補習学校（レーベン・ホートビルテュング）の協同設立者として活動している。そして「一八三六年は生命の革新を要求する」という論文を発表している。彼はこの論文において、教育による生命の革新を人々に求めた。しかも、当時まだあまり人々が注目していなかった幼児の教育の重要性を強調しようとしたのである。幼児教育を

考えようとする、女性の問題と家庭の問題を無視することはできないが、彼も、幼児教育の重要性を多くの女性と家庭とに訴えて、その協力を求めなければならぬと考えたのである。

一八三七年、五十六歳のフレibelは「自己教授と自己教育とに導く直観教授の教育所」（アイネ・アンシュタルト・フィアー・アンシヤウウンクスウンタールリヒト・ツーム・ゼルプストウンタールリヒテ・ウント・ツォア・ベレールンク）を創設した。ここで彼は幼児の創造活動を満たすための遊具として「恩物」（Gabe）を考案した。そしてその教育所を「児童生徒のための作業衝動をはぐくむための教育所」（アンシュタルト・ツァー・プレーゲ・テス・ベシェフティゲンクステウリーベス・フィアー・キントハイト・ウント・ユージェント）と改称した。そして、週刊雑誌を発行したりして、自分の考案した遊具や作業材料の紹介や、自らの教育理論を広く一般に広めようとしたが、文体の難解なことと無味乾燥なことなどが影響して反響が少なく、二年で廃刊になった。

一八三九年五月、フレibelの最大の理解者であったウイルヘルミネ夫人が病に倒れてこの世を去るという悲運に見まわれている。彼女は身体的には弱い方であったが、精神はさとく、愛において内助の力となることができた。カイルハウ学園にお

いて、ウイルソアの学園において、またブルクドルフの学園において、子どもたちに尽くした彼女の功績は高く評価されるものであった。

夫人の死は彼に大きな衝撃を与えたが、彼は悲しみに沈んでばかりはいなかった。同年ブランケンブルグに「幼児教育指導者講習科」を設立し、六カ月ずつの講習を行なった。この講習は一八四四年まで続いたが、その講習生の実習の場として「遊戯および作業教育所」(シュピール・ウント・ベシエフティゲンクスアンシュタルト)を併設した。そしてこの教育所を一八四〇年に「幼稚園」(キンダーガルテン)と改称したのである。

その後フレibelは、一般のドイツ婦人に呼びかけて基金を集め、「一般ドイツ幼稚園」を創設し、保母の養成を計画した。一八四〇年六月二十八日にその設立記念式典を行ない、彼はその必要性を一般に訴えるための演説をしている。こうして、この日が世界における幼稚園の創立記念日となり現在にいたっている。

すでに述べたように、フレibelは幼児教育における母の重要性を強調したが、家庭の母を直接教育するために、一八四四年に『母の歌と愛撫の歌』(ムッター・ウント・コーゼルリダー)を発刊した。人間教育の出発点は母にあるという固い信

念のもとに、芸術的に描かれた母のための聖書ともいわれているものである。

一八五一年、彼はウイルヘルミネ夫人の亡きあと彼の片腕となって働いていた教え子のレヴィンと結婚した。しかし、その喜びもつかの間、同年八月プロイセン政府は幼稚園禁止令を全国に発布した。フレibelは驚いて、禁止令は誤解のもとに発布されたものであるとして、その取り消しを求めた。また世論もフレibelに味方したが、結局は彼の願いは聞き入れられなかった。

このような苦難のうちにあったフレibelは、やがて病床につき身となり、ついに一八五二年六月二十一日、七十二歳の生涯を閉じたのである。その墓標はシュワイナに建てられ、墓石には「いざや、われらが子らに生きようではないか」(Kommt, Lasst und unsern Kindern leben!)と記されている。

(二) 幼児観と教育

(1) 神性

「すべてのものの中には、一つの永遠の法則が宿り、働きそ

して支配している。この法則は、外的なものすなわち自然にあつても、内的なものすなわち精神にあつても、またこの両者の統一すなわち生命にあつても、同様につねに明らかにあらわれている。……すべてのものを支配するこの法則の根底には永久に存在する統一者が存在する。……統一者とはすなわち「神」である。

すべてのものは神性すなわち神から出てきている。そして神性すなわち神によって制約されている。神の中に万物の唯一の基礎がある。

すべてのものは神性がそのうちに働いているということのみによって存在する。

このように、各事物に働いているこの神性がすべてのものの本質なのである」

以上はフレーベルの著「人間教育」の冒頭であるが、ここに彼の教育学の真髓を見いだすことができる。すなわち、フレーベルにあつては、神が宇宙の本質であり、また統一の中心であり、この神によってすべてのものは生きた調和、生きた統一のもとに創造されているのであつて、すべてのものが神的統一に基礎をもっているのである。したがつて、この万物を内的統一のもとにある有機体としてとらえる思想は、フレーベルの教

育理論の基礎をなすものである。

このような観点から人間をみると、われわれ各自の本質もまたうちに永遠の法則を秘めており、したがつて、幼児のうちにも永遠の法則が宿っている。しかも、彼によるとその永遠の法則が神性なのであるから、フレーベルのいう幼児の本性は神性なのである。

ここでいう神性とは、宗教的な意味での全知全能を意味するのではもちろんなく、また、単に児童のうちに静的に内在しているものでもない。それはたえず生成発展し、創造的に活動し、生命に満ち、生命を生み出すところの实在としての神性であり、具体性を帯びたものである。

教育の仕事はこの本性である神性を導き出すことにほかならないが、フレーベルによると「人間の本質を指して、もともと善でも不良でも悪でもないということは、すでに人性に対し、人間に対して、叛逆をなすことである。いわんや、人間は生まれながらにして不善であり、人性はもともと悪であるなどというにいたつては、一層の叛逆である」^③のである。

幼児の本性を神性と断じ、それが何のさまたげもなく働くときは「その働きは必ず善であり、また善でなければならぬ」とするフレーベルの幼児観は絶対的な楽観主義であるといえよ^④

う。

(2) 自発性

教育上幼児の自発性ないしは自己活動を重視する傾向はフレーベルを最初とするものではない。ルソーやペスタロッチーもこれを強調したことは周知の事実である。しかし、フレーベルはこれを一層徹底して重視している。自発性とは、自己自身の内的な動機に基づき、自己の興味と自己の力とにさええられる活動をいうのである。

すでに述べたように、幼児の本性は神性であり、その神性は決して固定的なものではなく、それは発達してやまないものとしてとらえられている。「人間は、否、人間のうちに在る人性は、外部的にあらわされたものとして見れば、決して、すでに完全にあらわれたる完結したるもの、すでに固定し確定したるものと見らるべきではなくて、むしろ、たえず生成進行し、発達し、永遠に活動し、そして永却無限の目標へ向かつて、発達と進歩の一段一段を進んでいくものと見られなければならない」^⑤

生まれたばかりの子どもは、ちょうど親木から落ちてきた熟した実のようなものであり、生命を自己のうちにもっている成熟した種子のような発展的なものである。成長発展のエネルギー

ーを自己のうちに保持しているのである。

フレーベルは、幼児をあくまでも内部に自発性をもっているものとしてとらえていた。そして、それは幼児のうちに固定しているものではなく、内から外へと自らを發展させるものであり、自己成長をめざすものであった。

われわれは、動物や植物に対しては、それぞれの個々の内部において働いている法則にしたがつてりっぱに發育し、よく成長するものであるということを知っているから、それらのものが自然に發育するように場所と時間とを与える。また若い動物には休息を与えて、強制的に干渉することを避けなければ、そのよき發育と健全な發展がじゃまされることもよく知っている。しかし、人びとは自然の動物と同じ法則にしたがつている人間に対しては、全く別の態度でのぞむのである。単に自然性を尊重しないということのみではなく、あたかも「子どもをろうか粘土の魂のように、人間の思うようにこねあげることができるか」と思っている^⑥のである。われわれの思うようにこねあげることができるということは、外界からの力が絶対的なものであり、幼児が自らの發育の自発性をもたないということになる。ろうか粘土はただわれわれの手で思うように変形できるといふのみで、そこには何の主体性もみとめられないからである。

彼は子どもの自発性を徹底的に尊重したが、この考え方に基づいた指導を実践した。一八二五年、彼に好意をもっていなかった政府の視学官が、カイルハウ学園において次のように述べている。「精神の自己活動はこの教授の第一原則である。それゆえに、ここで実施される教授は、幼い精神を一種の金庫にし、その中に現在流通しているあらゆる貨幣をできるだけ早くから詰め込むような仕方ではなくて、徐々に、間断なく、漸進的に、つねに内面的に、すなわち人間精神の本性の中に見られる関連にしたがって、単純なものから複雑なものへ、具体的なものから抽象的なものへと、その教授が何らのトリックもなく、着実に進行し、児童とその要求にきわめてよく適合しているので、児童は遊戯をするのと同じようにたやすく学習を進めている」^⑦したがって、彼によると、人間の教育とは「自覚力、思考力、さらに理解力をもつ本質としての人間を、意識と自己決定をもつて、内的法則すなわち神性の純粹完全な表現へと励まし、指導し、そしてその表現の方法と手段とを指示すること」^⑧であった。

世の多くの人びとが幼児を研究する場合に、彼らは幼児そのものを研究するよりも、幼児にいつどのように何を教えるかということを学ぶためであるのがつねであるが、フレーベルは幼

児そのものの自己発展を助けるために幼児を研究した。したがって、教授法の研究ではなく、学習法の研究に着眼したのである。このように彼は、子どもの活動的創造的な自己活動をきわめて重くみたものである。

(3) 連続発展性

フレーベルによると、人間の発達段階にはそれぞれの発達段階に固有な精神や心情や身体への要求がある。「人間が一定の年齢に達することによって少年が少年になるのでもなければ、青年が青年になるのでもなく、その精神、心情、身体への要求に忠実に幼年期、少年期を生活することによってのみ、はじめて少年が少年になり、青年が青年になるのである。同じように、大人が大人の年齢に達したから大人になるのではなく、ただ彼の幼年時代、少年時代、青年時代の要求が彼によって忠実に満たされていることによってのみ、はじめて人間が大人になるのである」^⑨

われわれはともすると、ただ単に外的に一定の年齢に達すると、以前の段階から抜け出たものとして、また全く別の新しい段階に属するものとしてとり扱おうとする傾向がある。このようなとり扱い方は、人間をその心情とは無関係に全く外的に形

式的にとり扱うものであり、個々の人間がある一つの点から連続的に発展するのを妨害するものといわなければならない。

周知のように、ルソー以前の時代には、一般に子どもは大人の縮図と考えられていた。大人を望遠鏡を逆にして見たものを子どもと考えていた。したがって、子どもは大人の域に達するまでは、きわめて価値の低いものと考えられていた。そこでは、教育は子どもの現在を犠牲にして未来にそなえたのである。ところがルソーは、子どもを「小型の大人」とみることをやめて、子どもの生活を、それぞれの時期に応じてじゅうぶんに生かすことを主張した。そして、この主張を一層おし進めたのがフレールであった。彼は人間の生命の発展は出生と同時に始まり、その後それは連続的に進行するものと考えた。

フレールによると、大人の本質はすでに幼児のうちに認められ、また人間の未来のすべての萌芽は幼児のうちに秘められているのである。そして、この未来への萌芽をのばす努力が教育なのであるが、そのためにはその時期を考えなければならぬ。すなわち、各段階に応じてそれぞれに内的な要求があり、その要求を満足するような努力を続けるのが最もよく、要求する以外のものを与えようとするのはむしろ有害なのである。したがって、それぞれの段階の要求するところのものを、彼が忠実

に、じゅうぶんに生き抜くことよってのみはじめて少年が少年になり、大人が大人になるのである。フレールはこの点に關して「他の關係においては深い理解をもち有能な両親が、幼児に対してはすでに少年や青年のするような行為をさせよう」と要求したり、そののみならず、幼児がすでに成年者にも似て、そのすることなすことすべてが大人のものであり、そして少年期や青年期を一躍乗り越えるようになることさえ要求することがある」と指摘しているのである。

元來、人間の本性は人間の内部において固定し、静止しているものではなく、つねに進展する生成物として、發展物として、一段階より次の段階へと創造的に進み行くものでなければならぬ。したがって、静的なものではなく、人間の本性は動的なものとしてはあくされなければならないのである。

このように、人間はそれぞれの時期において、各時期特有の生活を得させるようにすることがたいせつなのであり、いたずらに外的に基準をもうけて、人間の發展をその基準に合わせようとする態度は、人間の内的なものの發育を妨げるのみでなく、のびようとする萌芽をもつみとる結果になるのである。

(三) 幼児教育の方法原理

フレーベル教育学の中心課題は、すでに述べたように、自発性を持ち、連続的に発展しようとする創造的な存在である子どももの創造力を、どのようにのばし、育成するかということにある。すなわち、どのような教育の方法によって、ひとりひとりの子どものもつ創造力を教化し、育成するかということが第一の課題である。

彼は教育の方法の根本を子どもの活動に求めた、子どもの自然な活動こそが、子どもの生命そのものであり、また生活の自己発展なのである。子どもの活動は、具体的には遊戯と作業とにわけることができる。

(1) 遊戯

フレーベルは、まず幼児を遊ばせながら指導すること、楽しませながら、「創造的衝動」(ビルデウルクストリップ)を発展させることに努力した。遊ぶこと、または遊戯は、この期における人間の発達、すなわち児童生活の最高の段階である。なぜかという、遊戯(シューピル)というドイツ語は、すでにその言葉が示すように、児童が自己の内面を自ら自由に表現した

もの、自己の内面的本質の必要と要求とに応じて内面を外面に表現したものであるからである。遊戯はこの時期の児童の最も純粹な精神的生産であり、同時にまた人間生活全体の模範ともいうべきものである。あるいはさらに、人間およびすべての事物の内奥に秘められたる自然的生活の模範でもある。それゆえに遊戯はそれ自身喜びであり、自由であり、満足であり、また平静であり、さらにまた外界との平和であり、みる人にもこれらの感じを与えるものである。また遊戯はすべての善なるものでてくる源泉である。それであるから、身体の疲れるまでもうまずに落着いて自らよく遊ぶような児童は、成長ののちに必ずや犠牲的に他人の安寧や幸福をはかり、ひいては、わが身の幸福をも増進するような、落着いた根気強い有為な人間となるであろう。

児童が熱心に遊びに没頭し、じゅうぶんに遊んで、その後疲れてよく眠っているようすは、この時期における児童生活の最も美しい現象ではないだろうか^①。

このように、フレーベルは幼児教育における遊戯の価値を非常に高いものとし、その意義はきわめて深いものがあると考えたが、その要点は、遊戯による内から外への表現性と遊戯における生活活動との同一性であろう。内から外への表現性につい

ては、幼児の遊戯においてこそ人間の最も純粋な素質や、最も内なる精神が発揮されるとするのである。幼児の遊戯は、そのなかに将来の内的生活の芽を蔵しており、全生涯に向かつてのびようとする双葉のようなものである。遊戯は内に秘めている心情を發展させることによって、精神の陶冶や内的感覚の覚醒をうながすのである。また、生活活動との同一性については、彼は遊戯のなかに幼児の生活全体をみたのである。遊戯を教育的手段とするのみではなく、遊戯即生活と考えたのである。

したがって、遊戯によっていかに教育されるかというよりは、遊戯において幼児がいかに生きるかということが重要なのである。すなわち、「フレーベルは真によく遊戯する児童において、真に調和的な、真に絶対的な、人間そのものの真の生活をみつけたのである。遊ぶことしかできない幼児において遊戯が許容され、いわんや利用せらるべきだとしたのではない。遊びの生活に人間を見つけ、人間教育の本質的方法があると信じたのである」^⑫

前節で述べたように、幼児は自己活動し、しかもそれが連続發展するものである。したがって、その発達に対応して遊戯の内容も發展するものでなければならない。その基本的な原則は「単純なものから複雑なものへ」ということである。まず遊戯

の内容は最も簡単なものからはじまり、しだいに複雑なものへと發展するのがよい。幼児に与える道具は、したがって複雑に考案されたものではなく、簡単なものが適當である。幼児の発達段階に応じた遊具を与えると、彼らは自らそれらのなかに知覚知識の根源となるものを見いだし、これによって自己の内部を表現し、考え、構成してやまないのである。

(2) 労作

フレーベルによると、物と心とはその本質においては同一であるから、身体的動作をなすことはやがて精神の本質を啓発することになる。「精神を働かせられること、およびその間に立ちあらわれるところの外部的、呑むしろ身体的の作業、外部につくり出される仕事や生産に対する活動は、単に身体を強めるばかりではなく、また精神をも強め、精神活動の種々なる方向を發展させることができわめて著しいものであって、それがために精神に気持ちのよい『労作浴』(アルバイテウスバートゥ)をすませた後、再び新たな力と生命とをもって知力的仕事にとりかかるのである」^⑬

いうまでもなく、労作はそれによって得られる生産物や報酬のためや、それによって養われる技能のためではなく、労作そ

のものが即人生なのである。「人間の精神は、形態も構造もない混とん界に浮かび出て、形態と構造、また精神それ自らの本質と生命とを有するものを生ずるように働かなくてはならない。

これがわれわれが真の意味において、また特徴を認めて呼ぶところの労働と勤勞、仕事と創造との高い意味であり、深い価値であり、大いなる目的である。われわれが仕事によって内的なものを外部に表現し、精神に形態を与え、永遠なるものすなわち精神的生命に外部的な有限な、そして現実の姿を与えるという明瞭な思想なり、おぼろげな觀念なり、ないしは直接的な生き生きとした感情なりをともしなう勤勉と勤勞、仕事と行動とによってわれわれは真に神のようになるのである」^⑭

すなわち、自然はすべて神のあらわれであり、人間もその例外ではなく、神の創造になるものである。フレーベルのいう神とは、一切を包括し、一切を維持し、またそれは創造的な存在であつて、一瞬たりとも無活動の静止状態にとどまることはできない。神は連続的に創造し、たえず働きつづけるのである。このように神の創造になる人間も、当然神のように創造的に働きつづけないければならない。そして混とん界に生じた人間の精神は、その内的なものに外形を与えるように、また構造と形態とを与えるように働かなければならない。ここに労作とか勤勞、

あるいは仕事の重要性があるのである。

(3) 恩物

すでに述べたように、フレーベルは幼児の創造的な自己活動を教育の中核とし、遊戯と労作とによって、幼児の内的なエネルギーを外部に表現し、自己活動の力を発展せしめようとした。したがって、そこではいかなるものをどのようにして幼児に教えるかということよりは、いかなるものを通して幼児自身に学ばせるかということが重要になってくる。そこでフレーベルは、幼児が自ら創造的に学習できる遊具を考案したのである。それが「恩物」(ガーベ)である。

恩物を考案したフレーベルの基本的な精神は、すべての幼児のもつ創造的衝動を健全に育てようとしたものであり、それによって、まずまず幼児自身の創造力を向上させようとしたのであった。また、幼児のもつ創造的衝動のあらわれは、決して統一されたものではなく、多様性に富んでいることから、その遊具も、そこからそれぞれの創造的衝動によって何かを作り出せるような創造的要素を多くもっていないければならない。さらにそれは、幼児に何かを創造させるためのものであるから、既製品や完成品ではなく、基本的な形のもので単純なもの、しかも

そのうちに多様性に応じ得るような基本的な諸要素を含んでい
るものと考えたのである。

このような立場から、フレイベルの創案になる恩物は、すべ
て幾何学的な形態からできあがっている。その主たるものは次
の通りである。

第一恩物 毛糸のボール六こ（六色）

第二恩物 木製の球、円柱、立方体

第三恩物 木製の八この立方体

第四恩物 木製の八この長方体

第五恩物 木製の二十一この立方体、十八この三角柱

第六恩物 木製の十八この長方体、十二この立方体、六この

柱型

フレイベルはこれらの恩物に、それぞれ哲学的な深い意味づ
けをしているが、ここではその基本的な考え方について述べる
ことにする。

第一恩物は球であるが、彼によると球こそはすべてのもの
はじまりであり、また最後の形でもある。それはあらゆる形態
の中で最も初歩的なものであり、また最も基本的なものなので
ある。幼児は球遊びを通して、球を周囲のものに置きかえて遊
ぶことによって、自らの生活範囲の拡大をはかることができる

のである。

第二恩物の球、円柱、立方体は、幼児の場合には第一恩物の
ボールと同じくらいの大きさのものが適当である。円柱や立方
体はボールとちがって辺や角がある。それにボールとちがって、
確実に静止することができる。ボールでは表現されない諸要素
が表現されるので、幼児は球と比較しながらそれらの諸要素を
会得していくのである。

第三恩物は、一つの立方体を八この同じ大きさの立方体に分
割したものである。幼児はこの立方体から、全体と部分との関
係について知ることができる。八この一つ一つは全体の一部分
であり、また一つ一つはそれだけで、一つのまとまりのある全
体を形成していることを理解する。また同じものが八こあるこ
とによって、立方体を確実に自分のものにするができる。

この遊具は、つねに八を一組として幼児に渡すのがよい。そ
して、それぞれの幼児に応じて適切な示唆を与え、幼児ひとり
ひとりが工夫し創造し、表現するようにするのがよいのである。

第四恩物は、一つの立方体を八この同じ大きさの長方形、す
なわち「れんが型」に分割したものであり、基本的には第三恩
物と同じものといえよう。しかし、分割のし方が異なるので、
それを使って何かを表現する場合に一層変化に富んだ表現が可

能である。年齢がすすんでくると、第三恩物と同時に与えること

よい。形態を比較したり、多様な表現力を身につけることにより、幼児の心情は一層豊かになることが期待される。また、使用後の整頓も確実にできるような訓練をすることがのぞましい。

第五恩物は、第三恩物の発展したものである。立方体の数が多くなり、三角形のものが加わったことによって、一層多様な表現が可能である。幼児の年齢と発達段階に応じて、それぞれの生活形式や認識形式、美的形式など多くのものを表現することができると。その多様性から考えて、五歳以上の幼児に適切であろう。

第六恩物は、第四恩物の発展したものである。これはその数の上からみても最高のもので、形式も最も変化に富んだものである。第一から第五までの恩物のどれよりも多様な表現が可能であり、より複雑な形式が生まれ得るものである。これを集団で使うことによって、集団生活や社会生活に必要なことがらを身につけさせることも可能であろう。また、第五恩物と合わせで使用させるのもよいと思う。

(四) 現代的意義

フレーベルの幼児教育思想の諸原理は一般に次のようなもの

である。

(一)、幼児は自発性に富み、創造的活動的な生命の持ち主である。したがって、彼らの創造活動や表現活動、それに自発活動などをそれぞれの幼児に適した方法によって、じゅうぶんにのばすための援助と環境条件の整備こそが、幼児教育上の主要な課題である。

(二)、幼児を含めてすべての子どもは、自らの興味を土台にして、楽しみながら、しかも日常の生活を通して必要なものを学習していくように指導されなければならない。

(三)、幼児はもともと社会的な存在であるから、遊戯や作業などを通して、協力する態度や助け合う姿勢などが集団生活に必要な社会性の発展を旨とした指導がなされなければならない。

四、幼児の心情を豊かなものにするために、情操面への教育的配慮が必要である。美的に、道徳的に、そして宗教的にのぞましい環境づくりにつとめなければならない。また、デュイイはフレーベルの教育原理として、次のようなものをあげている。¹⁵⁾

① 学校の第一の仕事は、協力的、相互扶助的な生活の仕方について児童を訓練し、かれらの中に相互依存の意識を養い育て、かれらを実際に助けてこの精神を明白な行爲として実行させるような調整をなさしめることであること。

② すべての教育活動の第一の根源は、児童の諸々の本能的、衝動的な態度および活動に存するのであって、他人の観念を借りるにせよ、あるいは本人の感覚に訴えるにせよ、とにかく外部的な材料を提示し、適用することに存するのではないということ。したがってまた児童の数かぎりなき自発的活動すなわち遊戯、競技、物真似、さては幼児の一見無意味な動作——在来はつまらぬもの、無用なものとして無視されるか、あるいは積極的に邪悪なものとして難ぜられさえした現象——は、これを教育的に用いることができる、否、教育的方法の礎石であるということ。

③ これらの個人的な傾向ならびに活動は、さきに述べた協力的な生活の仕方を維持する上に用いられることを通じて組織され、指導されるものであるが、それはこれらの傾向や活動を利用して、児童が最後にはそのなかに入るところのより大なる、より成熟した社会の典型的な営為および仕事を児童の程度に應じて再現することを意味するのである。そしてまた、児童は生産と創造的な仕事を通じて価値ある知識を獲得し、確保するものであること。

このようなフレーベルの幼児教育ないしは教育全般にわたる思想は、後の教育界に多大の影響をおよぼした。彼の思想をも

とした幼稚園は、やがて、マールンホルツ・ビューロー夫人らの力によって、イギリス・フランス・スイス・オランダ・ロシアなどヨーロッパ各地に広く紹介されて各国の採用するところとなった。さらにそれは、エリザベス・ピーボディ女史らの手によってアメリカにわたり、この自由の天地において、見事に普及発展していったのである。ここでは、かつて学校教育全体の外におかれていた幼稚園が、子どもの教育の全体計画の中に位置づけられ、小学校と密接な関連をもった幼稚園として組織されていったのである。

フレーベルの教育思想には、たしかにある種の神秘主義的な、あるいは象徴主義的な傾向がある。それは彼の名著『人間教育』からも読みとれる。しかし、それにもかかわらず、彼の教育原理は現代の最も重要な教育のあり方と同じ広がりをもっている。幼児の自発性や自然的興味の徹底した重視は、指導の際の教材の選択や教育課程の編成上、きわめて現代的な意味をもつものといわなければならないし、また、社会性の養成の必要性は、現代民主主義社会の成員には基本的に要請されるものであり、その現代的意味も決して小さいものではない。さらに、すべての教授が直接的な活動によって、具体的な生活を通して行なわれるということは、特に幼児教育においては、その重要性はい

かに強調しても強調しすぎることはあるまい。

このように、フレレーベルの教育思想は、教育史家モンローも指摘しているように、^⑬現代の哲学的、心理学的、科学的な思想と一致するのである。特に子どもひとりひとりの個性を尊重する現代民主主義社会においては、フレレーベルの主張した教育思想の意義はきわめて大きい。われわれは、現在わが国の幼児教育が当面している多くの問題の解決のために、今一度フレレーベルに立ち還って謙虚にその主張に耳を傾ける必要があるのではなからうか。

(大阪教育大学)

注

- ①長田新『フレレーベル自伝』岩波書店昭和十二年 二十八ページ
- ②同右、二五七ページ
- ③フレレーベル(小原国芳訳)「人の教育」玉川大学出版部 昭和二十九年 一四〇ページ
- ④同右、七ページ
- ⑤同上、十九ページ
- ⑥同右、八ページ
- ⑦P、モンロー(川崎源訳)「教育史概説」理想社 昭和三十三年 二一〇ページ

⑧フレレーベル 前掲書 二ページ

⑨⑩同右、三十四ページ ⑪同上、五十八ページ

⑫倉橋惣三「フレレーベル」岩波書店 昭和二年 七十ページ

⑬「フレレーベル」前掲書 一三九ページ

⑭同右、三十八ページ

⑮デュイイ(宮原誠一訳)「学校と社会」春秋社 昭和三十六年

八八ページ

⑯P、モンロー 前掲書 二一八ページ

参考文献

- 小川正行 「フレレーベルの生涯及思想」目黒書店 昭和七年
- 荘司雅子 「フレレーベルの教育学」フレレーベル館 昭和二十五年
- 五 年
- 荘司雅子 「フレレーベル研究」講談社 昭和二十八年
- 荘司雅子 「フレレーベル」牧書店 昭和三十二年
- 荘司雅子 (編) 「現代幼児教育原理」亜紀書房 昭和四十四年
- マールホルツ、ビューロー(伊藤忠好訳) 「教育の原点 Ⅱ 回想のフレレーベルⅡ」黎明書房 昭和四十七年